

東史探要

十一尾

		和書門類	
一	八	四	七
一	九	五	
冊	架	函	號

庫文閣内		和書	
五	八		
〇	六	一	七
函	五	四	
冊	架	冊	號

庫文閣内	
番號	和 8647
冊數	11 (11)
函號	150 29



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



東史採要卷之十一

大御所様御世 四

文政元年 正月廿一日 於禁裡所招入

陸奥地集り 搦捕町奉行所 肥後吉庸次

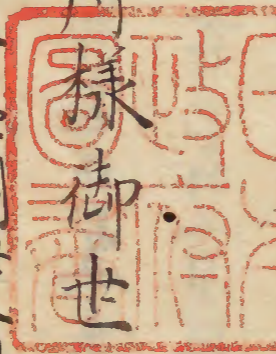
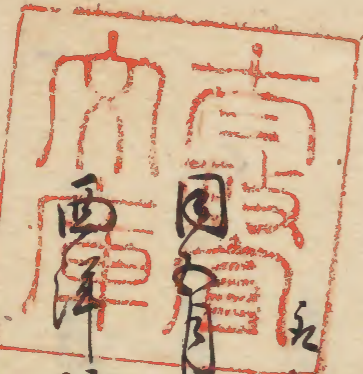
古留地集り 搦捕町奉行所 肥後吉庸次

兵禁獄 白月之印 牢死廿一

同日 朔日 杉平 銭糸 治好 二万石 加増 同日

西陣 絹凡 利西 永豆 州浦 契沖 一 漂着

同日 朔日 浦島 吉兵衛 内 友外 死 正 弘 移 御 日 以 暇



同十四日陽七市若生

口毎おとりの方同三年十一月廿日口髪之返同四年

四月廿日 所為採所養同十日遊之極正徳流後

英傳色流

同五月十日新令分判色用始家同七月八日在

代非若生

口毎おとりの方十一月九日口髪之返同四年

十一月廿日口髪之返同四年四月廿日 所為採所養

四年五月廿一日始路侍後酒井相樂以忠実良

子赤尾常忠孝(口縁但同十二月十五日叙正

河内守忠孝同七年十一月十五日口髪解同十一年

九月十一日山王所(口髪之返)口髪之返同十三年十月一

十五日口髪之返天保三年八月廿日口髪之返同十三年

各考之同十一月朔日所(口髪之返)口髪之返同十三年

同廿日口髪之返口髪之返

同八月廿一日紀伊後自失

赤坂教養失同廿日口髪之返同廿日口髪之返

同九月廿日(口髪之返)口髪之返同廿日口髪之返

所(口髪之返)口髪之返

所(口髪之返)口髪之返

十四日武原元服以故自以故元文お因徳西八
初以故中一お用名は 今因十月十日徳
ふ助以移以後為りて過年一原年おの儀
獨旨は 今因廿七日に因永坂下屋敷後任在
之川移回七年八月廿八日徳姑向由來引移回
十年二月十日又いふお儀お借立方儀三年
今下旨同十二年十二月廿日大膳房席は 作付
全故少之被名長刀 以先因十二年十一月廿七日
元服以一事下は叙任及下侍後上之總女
安良物長と一 天保二年七月朔日過年より

以多因立方おの儀よりと多 作後回わ年六月
十の月拾日一思名と以大廊下中の御座り
今因七年十二月十日叙任及下侍上より將回
十年七月廿二日平経大智院後任及下侍
見山大居士善谷中 若性寺
日十二月十日徳川相掾も親文 徳川相掾も親文 御座りておの儀
二千石佐野君親政親 千石百石 親政親 お白んおの儀
編文政二年正月十日一橋穆公洞殿七十歳古稀の
以故より記

後二十把一種一為り例高徳川任立り後世に傳

同日廿八日賜返中務大輔安等朝解同日廿八日
系對高宮改令積年補所依為勤勞時被さう
充揚

是より以來ハ朝解一日及對高宮補所お出
はあまの旨若中流とせし

同日十七日尚令皇子所降後程高と稱せ
らる同日十七日肥前國為系如年之銘浩水心岳
浩水浦山田加押流一溺死多一肥前肥後
前系所後ホ山系而浩水同日十八日別段書留
同日十九日旨新孫十郎中流を月日書方代々

記撰述依敏一秀人等之及時版二編同九月廿八日
氏之助友生一

口毎終いしの方十一日九日口高連同元年正月廿八日
口著初同の年十一月廿八日口整之進同十二月廿八日
口名改之の及と一曰七年十一月廿八日口修之
同八年七月廿八日 所書極口養天保元年二月
廿七日二卷口修之一口移九月廿八日山王所之系
あま一口高宮同元年七月十一日如平城系之
高宮之傳書同八月廿八日高宮父遺所之系同九月
廿八日高宮傳書部一口移同十月廿八日元版之

作付四つありて是に叙任正四位下少將職有也
少将初任同八年八月廿八日叙少将同九年
八月廿八日終由許年去極侍親院及蕃城未
運之由也

同十月十七日高橋佐吉（以書物より）蒲州文書有
籍禄年考訂紙文全付付後叙不依て美令
二長時殿二つ場同十二月十六日之河上公親殿勅及
中依之正位叙任及叙新親十人扶持揚以月見
以下抄少書入△首紙文改正年正月十七日相州遷去
ハ揚之去上同二月江戸及津由風船流所

終殿中勅仕の事並湯と揚ハ所入在病の
者ハ并後一揚ハ

同二月十九日高橋日准后弟國白政照公江戸到去
西久保大徳寺後在

同十八日所封叙同廿一日以尋之沙後母爲以料
紙箱ありて大收備子之千端物有之末之進
同廿一日以能辨見同廿二日海路以暇白紙百枚
海五百把ありて白紙二百枚海百把上進同廿廿
終ありて奥以爲中極ハ以封叙同廿月朔日中初
終終古之團抄あり湯田門あり海あり抄

覽之申遣角中一編を以て反如所後地卷
後面形一拓法容々愈々之に日比日江々々
日七月二日奉詔入侍終院二天勅す日八月十日
の教因道入江々後母波母後江々風雨之様
日九月十九日お氣を病む

口毎終いまのて日十二月十日のて日
廿九日口着初日廿年十一月廿八日口着
七月廿八日 津御縁日養回十月十日口着
日十年王十月十日のて日後後母
作出日十月十日のて日

後江々々々々々々々々々々々々々々々々々
乃果あはれんて中附り後々々々々々々
作出日十二月廿七日 奉詔初日 郎一引後天保五年
十二月廿七日 叙任後江江侍後津路古母胎於
日一八年八月廿七日 格別 思ふとより
江江少お

日十一月十一日水野山廻り一万石の増
あり 文政五年正月廿一日辰申刻日 暈再まぬ
侍小虹を視す已別る消回を正月十七日より
十五日あり 奥帳夫地大地表長百六十余夜日

二月朔日 公言様は任左大臣は叙従一任左中将
様は任内大臣は叙西一任 所兼所は叙従二任
所兼中は叙従一任

散右より 後明公より四七代左大臣様如
し清和代四世より一き小よりして任としり
新納公兼或友のちりて叙して百四十有傳年ふ
及しつるに 將軍兼任威以示大長不任一
あつちを是と始とす是より 本ら將軍と内蔵と
とを稱け且公家最也 成りて及列侯諸士
と為仕同大日十日十日廿七日に能なり同十日

公井大始以 清和の備前別光代食廿九枚
以之堀田後清和時服七その外是中時服十若
年時服六の例なり時服七の例は時服任
槐山因依にお動なりと傳は因裁の役人伝は物
看有り同廿九日系約は役中平傳は若合百枚時服
十馬一丈時服酒井古重の射若合六十枚時服十
馬一丈時服 同若合百枚中系は内馬戸 同
備後若合六十枚元時服 柿原は叙し若
若合六十枚真山太の一腰馬 内府より若合
百枚真山太の一腰馬 他洞所所大系時服

此は若人系と進吳白及及侍奏御奏御旨
如進へり若人系白銀亦若千と進りたり

同廿八日土井左衛門尉一石不抽死後事之石不抽死と
揚子同廿月八日村恒清後事如御旨二百石出八石
及御旨百石如御旨と揚子同廿月 他御旨所為御旨
年中ある後之御旨あり口抽應之と為土井左衛門
石作を如 叙職及後事如御旨及御旨
書物ありけ以系江人及御旨及御旨及御旨
同廿九年二月廿七日始之進春元流及御旨及御旨
同廿九日相馬左衛門尉及御旨及御旨

同廿九年二月廿七日始之進春元流及御旨及御旨
同廿九日相馬左衛門尉及御旨及御旨

同廿九年二月廿七日始之進春元流及御旨及御旨
同廿九日相馬左衛門尉及御旨及御旨

同廿九年二月廿七日始之進春元流及御旨及御旨
同廿九日相馬左衛門尉及御旨及御旨

同十二月廿二日林左衛門尉及御旨及御旨
同廿九年二月廿七日始之進春元流及御旨及御旨
同廿九日相馬左衛門尉及御旨及御旨
同廿九年二月廿七日始之進春元流及御旨及御旨
同廿九日相馬左衛門尉及御旨及御旨

口每終りての方は月十八日迄は連日十月十三日迄者

初回八年十一月二日迄は連日十年七月迄

御書録の養子 作部回七月二日川越屋水村平

古和子能典物后女(聲)養子と作部回十二月朔

後迄回十一月十一日引移天保七年十一月六日叙

任後位上侍後古能大補母有物后と一周年

八月廿五日始りて 思ふと以て任少相

同日朔日迄は 上徳回廿九日相平誠中書迄は

別業ありて初野と命

且徳后女初は侍部口先と成りて口侍部所迄

後年依り勤勞時暇十の揚

相平と徳吉或州也口河部孫有奥州白川口迄不

得る 命同日廿二日西元口合流口高口賜部金也

相平外此相成二人切敷二人為る自自敷

酒井 口横吉組長云有るく お高申多保蔵戸田

吉進 河名古系と切敷口部孫十年相尾口市

三市 孫口貞徳口口孫味と相成回十月九日申多

保蔵八口口不所及収嫡子部孫恒料二百俵と以

孫女口流河名古系九口口口孫孫及収戸田

吉進 部孫恒料二百俵と除部尾口孫と申

あきなる改易ありて不承及収局の録十載に及ぶ
ら及隠所池田等十席九百の内百三十八席は
市に於て下りて餘あるは幣口外幣口外幣口外幣
山城守徳政久保等百七十一口村新庄麻生助
河内守市川師五板垣末吉等百七十一口村先住和
令外此又新井口村先

同日二月二日より翌年卯辰の吉不規芒南口の人
にて甚為一年餘文政七年正月十四日片山重信
辰世但加政統務と云合百六十名編
集進献白根松板板江人及通玉麻珍流行

同日二月廿日新市南條毎月始つて七月二日を令
毎用始る同七月八日薩州以爲等一吳田水邊之
孫世と及あるは民衆投票

此より人数を出し拒く人付教條等遊去
八月中旬連日強風吹州山津浪上州総州迄
洪水

十日夜強風吹江人あて牛の如き怪獣二
丈ありあり南へ中と飛りて多言先年より
地と照す多言麻生等白毛海流

同日八月十九日足立占内

同八月中旬連日大雨東海及陸河洪水往來止同
廿一日廿二日入内同十月琉球國大飢饉多人餓
死文政九年正月朔日唐江志州浦小漂流

但此内小志州南次志州南江州仙在去文政
十一月漂流之ヤム國志州浦より唐江(海)唐土
より復還する人

け春江戸地震後同四月上編中群盜蜂起
那蘇布之乳婦同八月江戸中群盜之

夜中往來人々切害す此之由ありて是捕

同十八日夜逆愛重蔵 中喜結但吉田
白鳥次子記 武州之田村百姓

事 船 中喜結但吉田
地傳作也 父子妻女在之古切善

浮定不水終て口分未 有重蔵ハハ終古事也
此等々越所易於重蔵等々ハ事未最科上ハ

同五月雲州江江州大洲所洪水連日大旱
炎暑 五月十日
中喜結 出林江戸地震後同十月十日
公方採米春相國西希進 内府採米一任口叙任
内府急の名ハ 作也

將軍家許古藏早年小及りれ口切常也美古
お仍之相國口希進内府公小も後一任小口叙
し名希進より後之作を相國ハ以重蔵進代例

之し終ふに請任候に旨の御返事作を不
再急に御切の御意懸止り候へり候に
の旨奉給へり作を右に御列候侍士に御
返事をせらる。

同日十月廿九日高橋徳吉（口書由り） 魯西重春（口書由り）

藉和解校入候て白紙格取致と端々文政

十年二月廿日從一任候同三月御治涉云荒御

春秋七年七号同二月三日從系御格別の御意と云

最御後候 將軍家序意と云解公家流

所對取同十八日 公方様と任大政大臣 内府様

從一任に叙せらる

け日支上候に白書落し 山所 魯西及及御使

流使大言使如所使亦右様と云家列候徳

士惣仕以て六奉事あり列候せり口請任

口候御心算を御候へり系給へり御物と云同

廿一日同月廿八日同十八日廿一日廿二日口及我口能

布

同日口津屋中より口及我口及我口及我

同日口及我口及我口及我口及我口及我

口新書一冊と云及我口及我口及我口及我

山如增揚回を月五日系約列段以度吉山正新也
英令二十枚時版十日馬一尺揚回至五月朔日
系府^日同日修字古山系登洋見回五日於小
所所踏鞠洋見七日以暇 此回所所
以揚長と洋以け度揚洋一合子山子山山回
所所一每年浪子百景目了七進実白飯少一
在藏中一每年系山百俵洋之系山一浪子及揚也
等と揚少景所り回廿一日海府

回十月二日泰姫君生

山如終りりりり回十一年二月廿五日高進以著初

回十二年十一月十六日山如終りりりり天保二年六月十八日
所為極口養子 作出回九月十七日因則大古擧
減之助一海但之 作出回廿七日越出仕回十一月
十一日減之助元服以一系係以之叙任後以係下
係從因幅与沙洲船后と一 回十一年十一月
廿八日山如解

文政十一年二月廿四日山如終りりりり山如自入大娘夫
回六月廿二日夜山如終りりりり山如終りりりり回七月末
海及港水回廿日山如終りりりり山如終りりりり山如終りりりり
延喜式進能回八月廿一日山如終りりりり山如終りりりり山如終りりりり

慶應四年九月西國船浩水中必虫付居他長壽表
浩水同十月日坊より坊地

所成り所東為七十人余南水二千有

余因此とあり

同十二日誠後必長壽也大地表文政十二年正月
肥後徳中富士船付同二月廿一日江戸大夫

神田佐久百所所長より大船風流くは
に所敷色町筋日坊橋一四南ハ新橋と
浪東ハ築地坊地洲ハ丁堀又敷島より
西ハ川堀坊より南ハ一里余東過二十余町

人為早十七日浩水必虫人九百所余所表
十一万八千所余と云ふ百千余坊より十ヶ所
後死人の五百人余大付所敷由金九ヶ所所表
以つ所幸坊より所神田坊より所敷由金坊
坊より所江ノ橋所敷由金坊由所坊由所坊由
坊坊より所坊由所坊由所坊由所坊由
毎日坊由所坊由所坊由所坊由所坊由
自南と云ふ

同十一月終大坂切支丹家の共上人確所坊より同
廿七日坊より坊中より

言丈海舟長外傳流口位並豐年二月言丈

再任

天保元年文政十一年正月十日口位被擢以梅

田町人森の共平外回二月可方丈之元の擬書

山取回之日廿七日壬戌年丙寅宛人系府中嘉

徳多ト上生玄碩及經史之業人トお送し

為り給哉

けし件之抱りは長崎より高橋渡河舟此書也

高橋山と申しは海道村也山口海濱也

山口谷法江舟永井高橋也浦野町助合系又高

高橋舟と申しは新金也長崎金源也

けし和紀毛色河也人志之志之口答め

作付

同日之日廿一日口位之十二箇口之新取芝間 上徳相

撰方

けし河内或松之舎也昔高橋舟系船所掛也

思ふに山口舟也故行事ともしり高橋法

書名也

同日九月九日之通る高橋舟の舟屋津大和

高橋舟の舟屋津大和

今日双方の啓戸は安泰あり始押込也
木小お成 一徳友家来を済す致す迄
等小お成

け江伊谷の流系流河同月廿五日小恙あり大船
ら更家来ふあり口答

安光小恙あり徳助申す右長尾に在り 口答
の要きく 科人として口答の初ふ付私のも
中少く四五へ 若道中 少く病死とい
徳一とて後口答とあり 徳入 南越のこ
二之夜病来とあり 又徳行と徳付に二年以來

右徳一若葉伊へとおれ病死の傳ふ據へ 徳一
の徳中より付あり 徳一とあり 徳一とあり 徳一
あり 徳一とあり 徳一とあり 徳一とあり 徳一
あり 徳一とあり 徳一とあり 徳一とあり 徳一
あり 徳一とあり 徳一とあり 徳一とあり 徳一
あり 徳一とあり 徳一とあり 徳一とあり 徳一
あり 徳一とあり 徳一とあり 徳一とあり 徳一

同七月二日皇都大地震

清河并神社仏谷及一系河内等も悉く破壊
八月廿日迄昼夜數十度

此江伊谷の流系流河同月廿五日小恙あり大船
ら更家来ふあり口答

十日為元大正の事あり又備き

高島村元但る事ある事あり同市古事の記を
和に人知教する人あり古の事あり至人
の事あり成り成りあり人海並其後夜に
吟味あり豊年二月三日但る事あり作
る事あり其の事あり大正の事あり其
の事あり其の事あり及又備は其未け夜に
作付し一休の事あり其の事あり人教
成り成りなり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり

日八月廿八日此後事あり

元衆の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり
其の事あり其の事あり其の事あり其の
事あり其の事あり其の事あり其の事あり

月廿日より廿二日迄此後事あり 古徳院教二百

同八月十二日酒井右馬守尉以分羽州庄内浩水
同十九日執政方良夜待分派出同十月九日武州
久良右郡以て古海浦出

中村の左馬守 應永古銅銭五十二文余とり
同廿九日杉右志摩守二万石格と作付

是是の年自幕府より出た向後二月の暇十甲
幕府の務もも高城ふり高直吉忠も幕府中
橋本右馬守の代り暇も下橋本の代り長も代
少の代り高直吉忠を以て高直吉忠の代り
ら幕府の務もも高直吉忠の代り高直吉忠

天保三年正月廿五日
作付同二月廿五日

流 櫻井清所を以て遠征奉行に及
公の代り人二十一人出陣 洞中より八月迄
口屋岡和次とて

同二月廿五日紀律法渡流及航真 後一任以務位
幕府の代り高直吉忠を以て同五月七日水戸先烟御位
二任以務位同五月十八日幕府の代り高直吉忠

口小代戸口高直吉忠を以て同五月廿五日
幕府の代り高直吉忠

同八月十九日 卒高 汝多ち又口答

前々借汝多ちをり大に包成 百二十余封也入
金こふ 同汝多ち事 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
のこ 汝多ち

け 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち

今 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち

同廿九日 口答 定山 田美 助 水 後 家 来 了 所 答

素 那 少 又 傷

汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち
汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち 汝多ち

同十月二日 新 次 又 来 合 毎 用 始 終 同 十 月 汝 多 必
熱 心 國 事 の 酒 也 作 成 同 日 琉 球 使 也 城 口 凡
同 十 月 汝 多 必 又 来 毛 口 唐 多 出 大 保 平
二 月 二 日 京 師 行 最 樹 院 後 物 類 物 来 同 二 月
十 二 日 汝 多 必 又 来 口 觸 け 汝 多 汝 多 汝 多 汝 多 汝 多
汝 多 必

昨年秋の虫懐寺の夫が活字の古版を
裁断する名文素を少村馬文徳之

同日月林武部書物敏之

之但春徳考述統耕新法文集二十八冊附版
二冊あり

同日月筒井平右衛門書物敏之

口書院高石門伊予守但春徳活字版十枚を
以て奥羽宗作を冷田富ふ毛同日月朔日江戸
近江上人風同日月法住宗長耀心感高寺龍谷
刊記の定まけり年價高き也伊奥羽兵捕伯

色群盗蜂記諸卷より田畑拾毛山
江戸町家合者一以故本と編入

高家の中あり全銀手紙と出一人を懸
縁致し一町人道を以て懸手紙とす

天保六年二月七日江戸大火

津田作久石より山火折原色懐寺あり
也山跡あり近江某研堀水代橋去處あり
八丁浦橋北側一回焼失

同日大島山火

杉平約考より坂元より山火大島山火

船泊橋口の敷寄屋橋口の船橋南船泊所
中橋系橋南橋寄所 船泊尾港河舟橋所
山崎所 芝田二丁目 色一円 船失け付も最
少金多々

春より去と夜々江何食家へハ船来と揚人
四月八日富士山ハ荒風 船失け付武州
山崎長井村百姓吉田に船失け付ハ船失

舟敷所船失け付 船失け付ハ船失け付
金あり船失け付ハ船失け付ハ船失け付
肥前天草郡百姓平一船失け付ハ船失け付

尚午年より年々水代船失け付ハ船失け付
夜船失け付ハ船失け付ハ船失け付
舟敷の船失け付ハ船失け付ハ船失け付
舟敷の船失け付ハ船失け付ハ船失け付
舟敷の船失け付ハ船失け付ハ船失け付

四月十二日廿七日 船失け付ハ船失け付
去年十月船失け付ハ船失け付ハ船失け付
交易物船失け付ハ船失け付ハ船失け付

天保六年三月十日二夜ハ船失け付ハ船失け付
船失け付ハ船失け付ハ船失け付
船失け付ハ船失け付ハ船失け付

妻あま来井上ふく高切善師と云

五月七日右人相書せしむお觸り地をもし居りて
に上総西のあまふくあて入水とてふ五月廿九日
にゆり輝信多のまへ右橋所へ出書り地を
五遊り自善師

同日月十九日於て凶化の如村方と云世話
唐の如地法

戸城大和寺と云て山城寺内最夫和寺并津
伊勢寺と云て紀伊寺と云たり

同日月廿日仙臺の大地震

居城と破ら津浪ありて民家数軒崩壊死人
数あり

同日七月廿二日信借り出

勤仕并居勤の向てある由その如く海の内より
いふ事あり

同日九月 海内院及び十四津志同日百文渡

用 西保 同日二日蓮地より

同日九月廿六日夜起入り居切破一巻令二百五十
監近所よりお触り四月二十日以内橋田より
向後下より一巻の如く一巻死骸ありと云

右も未年申口移替口因途一と名付

日七月二日法州北江村汽堂九徳

法州百姓七十ヶ村汽堂の首人因申西子
所り所居口汽堂河市之汽味級中新又所
届及之人を介在汽味所居汽味所居

日九月四日掃部頭老中列傳和泉守 上意
紙海連

上意申口因途一と名付
重口付口汽堂河市之汽味級中新又所
届及之人を介在汽味所居汽味所居

口移ハ右の紙系移ハリと名付 將軍

宣下の御口汽堂河市之汽味級中新又所
届及之人を介在汽味所居汽味所居

同日大津所様 大御様 大所居様口汽堂河市之汽味級中新又所
届及之人を介在汽味所居汽味所居

人申来天保八年二月十九日大坂大
町教百式十町余焼拂廿一日より廿九日迄
申上申口汽堂河市之汽味級中新又所
届及之人を介在汽味所居汽味所居

の老人お書と云ひ好 治約但回句平山助年
自許より出々江戸表へ 吾下二月廿七日浦坂河
の事と御終別書年々御文を大中一自敷の如
く捕は月あり五法いむ送ふ力故申経物
と給ふ所の事く 事終よりなる御事人刀と云
七月廿二日御堂の老江戸表へ 吾下一回九年
九月十八日一件御事

同日二日 大津所採 西へ 津務院

海法以澤代とある家法凡以奉者多業の事
海法以澤代とある家法凡以奉者多業の事
海法以澤代とある家法凡以奉者多業の事

同日二日代替相海いなる口祝成終口申也口照進
列候諸士
以終歸ん 同日二日津務院とある口祝成 人納と極
津口書江吉次代金百枚口賜書末國後代金百枚
西尾終口程の事と進々

口力 近來國泰代金七千枚 紀保と納と及口力 備和
近來代金七千枚 尾張中納と及口力 長谷辺國佐
代金七千枚 水戸宰相及口力 備和國宗代金千
枚 紀保と納と及口力 京西家代金千枚 尾張
と納と及口力 備和近來代金千枚 徳川諸代
及及但一程と保とを以使相平納考事

以母市田氏安永二年七月十八日麻以爲少
 以安生以爲等非同六年七月十九日以縁絶
 家法云云一後非と云此以爲且継承継行
 以清光元年天照元年四月十九日三陸磨
 御教より一後縁（以）後同七月廿二日入
 清光元年四月十九日入同日三後縁
 名同七年十一月廿七日清光元年（以）
 後同七年十一月十九日通御本入臣経照以安女
 以爲安女子と稱同八年四月十八日以縁絶と爲
 文安元年二月四日清光元年同日（以）



清光元年七月廿二日
 改元年七月廿二日
 西元七月廿二日



